

ソーシャル & エコ・マガジン

# ソトコト

No.155  
5  
May 2012  
SOTOKOTO  
800YEN

エコママもイクメンも、社会みんなで！

## ソーシャルな子育て

raising happy kids

ナチュラルな健康  
オーガニックな食  
コミュニケーティブな遊び  
クリエイティブな教育  
3人のリトル・ファーマーたち  
...and more!

リニューアル新連載！

古市憲寿「シャカイ系若者白書」  
大野更紗「バリアフル！」  
荻上チキ「サポトレ」  
駒崎弘樹「参加論」  
...and more!

リニューアル記念  
特別付録



ソトコト×スタジオオーカ  
今治のハンドタオル

別冊付録  
チビコト



食のリ・クリエイト=再創造  
監修=福岡伸一

ソトコト 155号 (No.155号) 2012年5月1日発行 (毎月1日発行)



農と人をつなぐ、あるプロジェクトのお話。

# 田園には夢がいっぱい!

農家、デザイナー、料理研究家、イラストレーター。一見なんの関連もない人たちが、滋賀県に集まっています。いったいなにが始まっているのでしょうか?

photographs by MOTOKO text by Hideki Inoue

琵琶湖は関西の水がめだ。2府4県にまたがる琵琶湖。淀川水系流域には約1200万人が暮らしている。琵琶湖の東側には西日本を代表する米どころが広がる。大河ドラマ「江」の舞台となった長浜、新幹線の駅のある米原周辺は、一日の寒暖の差が大きく、降雪量も多い。うまい米どころの条件を満たしたこの地では、古くから米が作られていた。湖北地方で農業を営む若手農家たちの集まり「Kanda」(以下コネファ)は、ワークショップやマルシェ、アーティストを開催するなど、活躍がめざましい。名前が横文字なので、新しい集団かというところではなく、昭和27年に発足した「滋賀県湖北地

域の農業を担う青年農業後継者クラブ」が前身の歴史ある農業集団だ。農業は孤独な仕事だといえる。合理化が進み、田植え、草刈り、収穫と作業の多くは一人でも可能だ。その孤独を埋めて、技術発展や情報収集のためにこの集まりはある。

写真家のMOTOKOさんは「田んぼに立つ彼らは、スタジアムに立つイチローのように美しい」と、湖北の農家を評して言う。

MOTOKOさんが仕事で接する俳優や作家のように、農家を一人のクリエイターとして尊敬している。「だって、芸術品のようなお米を作られますからね」と彼女は言う。

MOTOKOさんは6年ほど前から滋賀県に頻りに通い、「田園ドリーム」というプロジェクトを立ち上げて、彼らを撮影してきた。通常、写真家は対象と一定の距離を置く。それは写真というメディアが「客観の装置」であるからにはかならないが、彼女は積極的にコネファのメンバーを都会で行うワークショップやメディアに登場させる。時にはみずからイベントをプロデュースし、彼らを巻き込む。つなぐが正しい、そうでなければ新しいものが生まれない」と彼女は考える。コネファやほかの地域の農家、編集者、アーティスト、デザイナーたちのゆるやかな連帯が滋賀県で生まれ、動き始めている。



湖北の農家と大阪のクリエイター。ものを生み出すアーティスト同士が出会いました。

写真家、デザイナー、写真家、イラストレーター、料理研究家たちが、野原農家・西平昌一さん(奥列左から4番目)の「純粋な玉田」のいちごハウスに集まり、撮影。写真には農家アーティストの作品を飾りました。その日のワークショップで農家がコネファのメンバー。奥列左側のgreat家の藤原さんは大阪を拠点に、家具・空間・プロダクト・グラフィックのデザインなど、さまざまなクリエイティブ活動を展開しています。